ウトロ遺跡神社山地点 第三次(1990年度)発掘調査報告

石田　肇[1]・松田　功[2]・西本豊弘[3]

1．〒060　札幌市中央区南1条西17丁目　札幌医科大学医学部解剖学第2講座
2．〒099-41　斜里町本町49-2　斜里町立知床博物館
3．〒285　千葉県佐倉市城内町117　国立歴史民俗博物館考古研究部

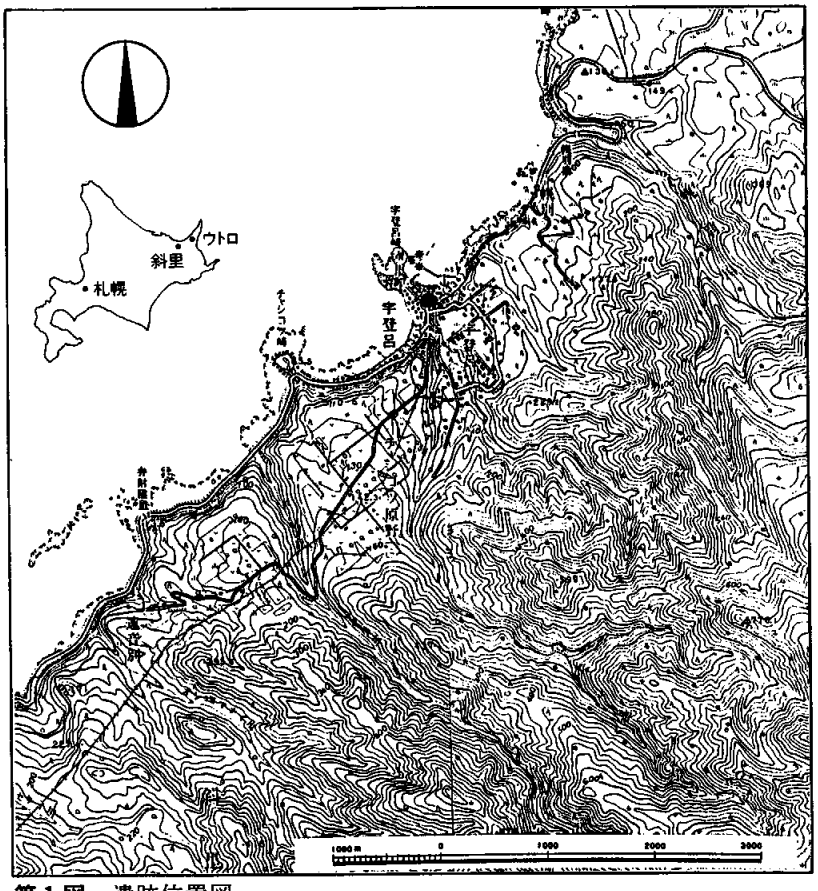
第三次調査
　発掘調査主体者
　　石田　肇（札幌医科大学解剖学第二講座）
　発掘調査メンバー
　　石田　肇（札幌医科大学）
　　西本豊弘（国立歴史民俗博物館）
　　小渕忠秋（慶応義塾大学）
　　佐藤孝雄（慶応義塾大学）
　　松田　功（斜里町立知床博物館）
　発掘調査期間　1990年10月3日～10月8日

1．ウトロ遺跡神社山地点の概要

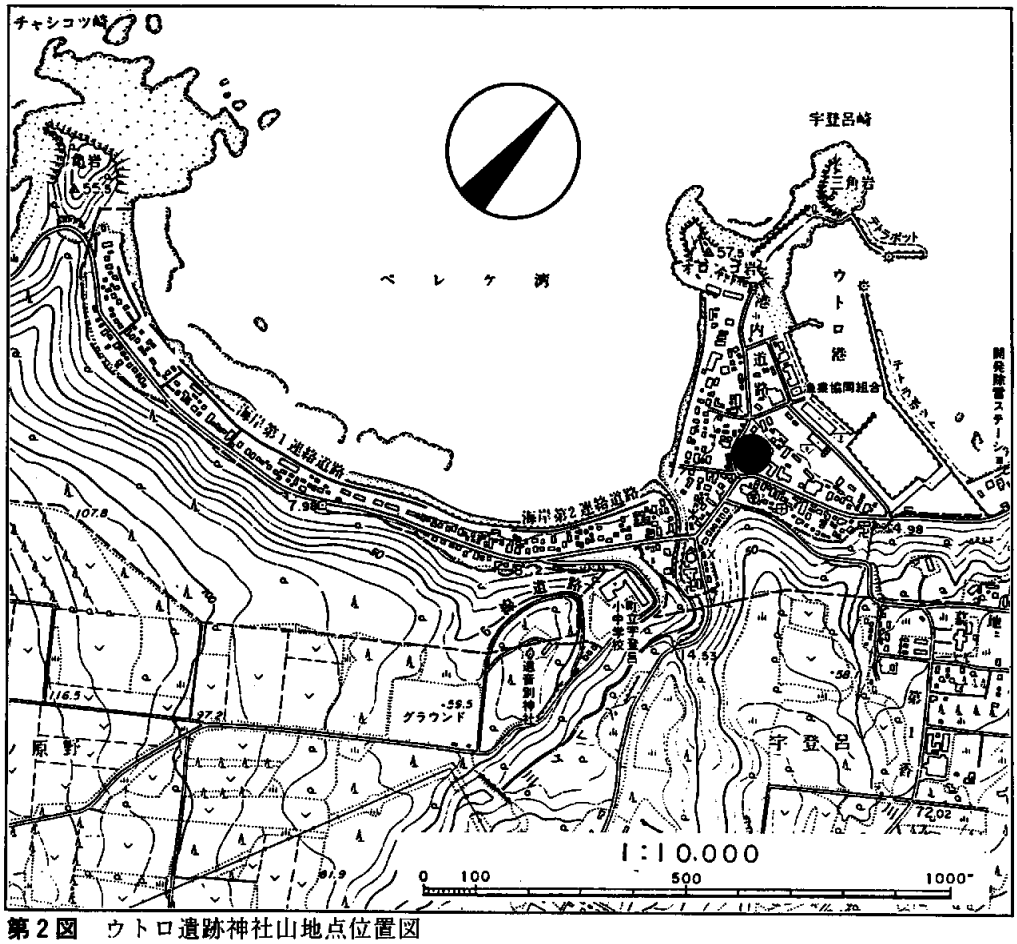
位　置　斜里市街地から国道334号線を北東に約40km進むとウトロ市街地があり、このウトロ市街のほぼ中央に神社山地点は位置する（第1・2図）。神社山本体は、安山岩質集塊岩を主とし、泥質頁岩・砂岩層を挟在する新第三紀のウトロ層の岩体から構成されており、遺跡はこの岩山の北西側、旧洞窟跡に存在する。この岩体を構成する岩石は非常に脆く、フェンスと金網によって辛うじて防備されているが、大地震などが起これば人家などに影響を与えるのは必至である。洞窟部分の標高はフェンス部分で4.5m、洞窟開口部上部で13mである（第3・4図）。

ウトロ遺跡神社山地点を研究者のみならず一般に広く知らしめた文献は、河野広道博士が執筆担当した斜里町史・上巻（先史時代史）（1955）が最初であり、遺跡の所在地や時代・性格などを詳細に解説している。

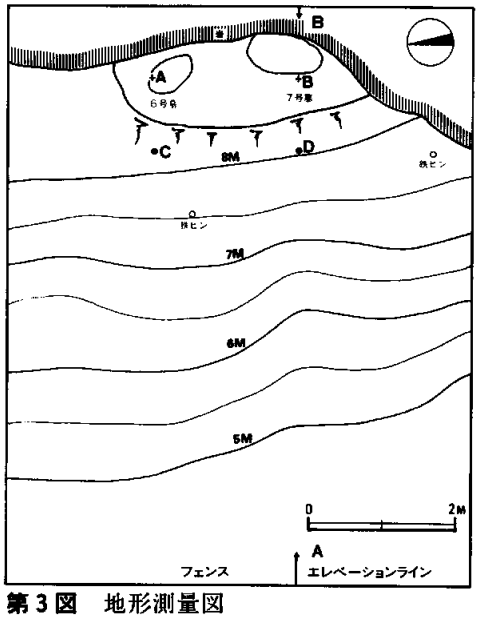
これらの文献や古写真を見ると、現在の道路や宅地になっている状況とは全く違う砂浜が広く続く海岸であり、海に向けて開放されていた地域だったことが窺える。



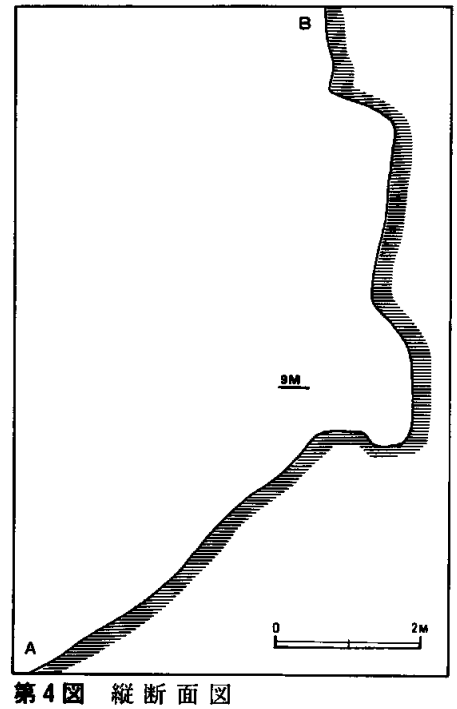
第1図　遺跡位置図



第2図　ウトロ遺跡神社山地点位置図



第3図　地形測量図



第4図　縦断面図

層　序　第二次調査（1987）の際に確認した基本層序を基にした。Ⅰ～Ⅳ層から構成されている。

Ⅰ層　暗黄灰色土層　安山岩角レキ小破片を含む。

Ⅱ層　淡黄灰色土層　安山岩角レキ小破片を多く含み、黄褐色降下軽石
（Ma-b5）を僅かに挟在する。

Ⅲ層　暗黄灰色土層　数cmの大きさの安山岩角レキを含む。

Ⅳ層　暗褐色土層　　安山岩角レキ小破片を含む。

2．調査結果

第三次発掘調査の結果、墳墓２基（６・７号墓）とその墓に伴なう埋葬人骨２体（６・７号人骨）並びに副葬品を精査し、完了させた他、第一次（1980）・第二次（1987）調査の際、回収しきれなかった３号人骨やその周辺に見られた土器・石器、動物遺体などの遺物も取り上げ、完掘するに至った。

3．遺　構

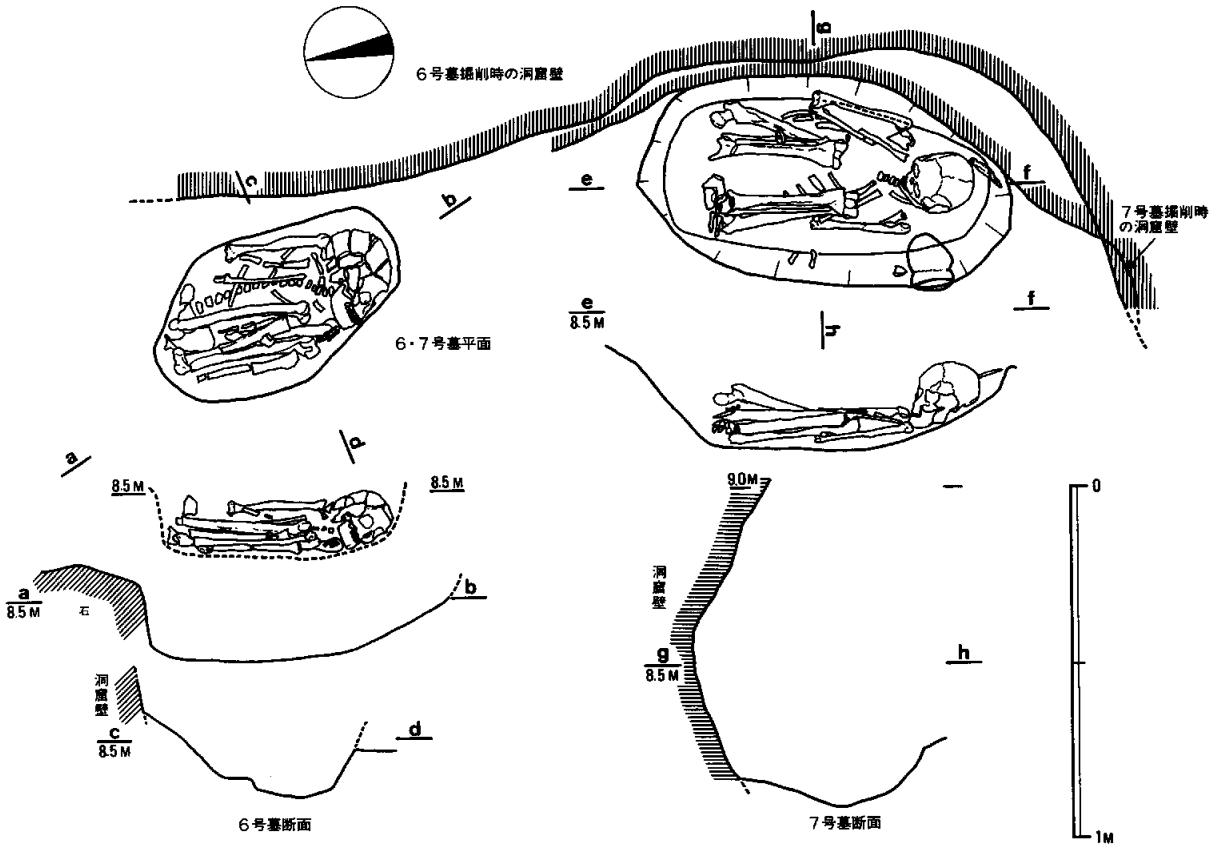
1）６号墓（第５・６図）

第二次調査で５号墓を完掘させた後、今後より下位に遺構があるか否かの判断を行なうための事前調査とも言うべき掘削を行なったところ、底面の僅か数cm下から頭骨の一断片を発見するにいたった。その事実を踏まえて今回調査を行なった遺構が６号墓であった。

遺　構

形　態　平面形ー長楕円形、大きさー長軸（南北）75cm、短軸（東西）45cm、５号墓底面から計測した深さは約20cm。墳墓の西から南方向にかけ安山岩の角レキで境界をつくっているかのような配石が見られた。

人骨出土状態　骨はほぼ完全な状態で出土し



第５図　６・７号墓及び人骨実測図

た。埋葬方法は極度の横臥屈葬で、背中側は洞窟奥壁（東側）、腹部・足側は洞窟開口部（西側）を向いていた。頭位は南南東～南方向であった。

遺　物　5号墓の取り残しの遺物であるか6号墓のものであるか帰属が明瞭でない土器片や動物遺体などの遺物数点が見られた。

小　括　保存状態がよくほぼ全身の骨格が残されていたが、埋土がレキを多く含む土であったため土圧で骨が潰されており、取り上げる際に砕け落ちる骨も多かった。この遺構が構築された正確な時期を言及しうる遺物は出土しなかったが、第二次調査の際に上部で確認された5号墓より古い時期の墳墓であることは間違いない。

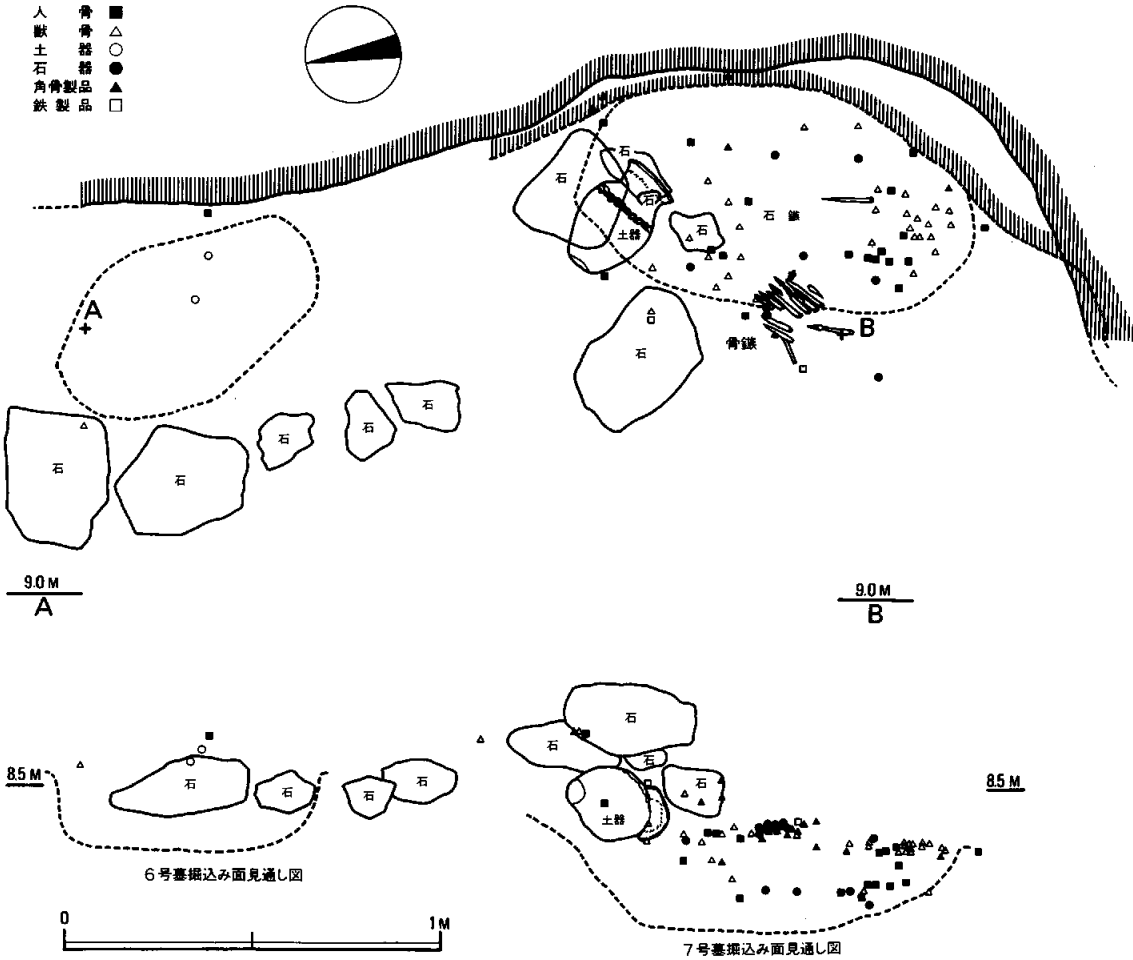
2）7号墓（第5・6図）　6号墓の南側、洞窟奥壁に一部残存していた3号墓遺物を精査した後、6号墓掘削時に現われた配石の下部から壺形土器を発見した。また、その西方を掘削したところ骨鏃や石鏃が集中して出土した。その下をより掘り下げたところ、人間の頭骨が見つかり墳墓であることが判明した。この墳墓を7号墓、人骨を7号人骨とした。

遺　構

形　態　平面形－長楕円形、大きさ－長軸（南北）100cm、短軸（東西）60cm、土器出土上面から計測した深さは約45cm。

人骨出土状態　骨はほぼ完全な状態で出土した。埋葬方法は極度の仰臥屈葬で、頭位はほぼ南方向であった。

遺物分布状況　平面分布を観察すると獣骨は人骨の頭部と足側に別れて分布し、頭部側はほぼ同

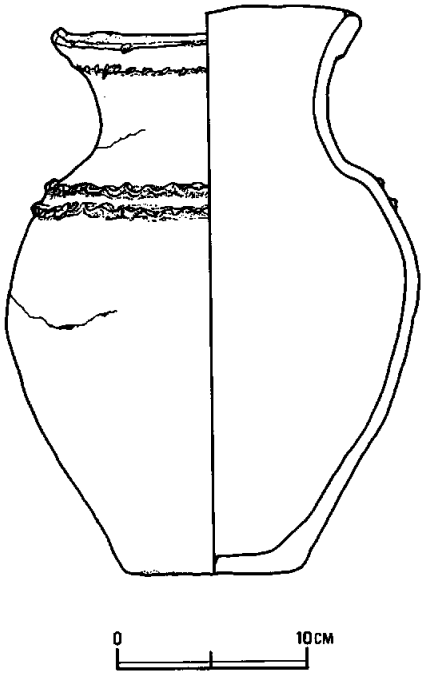


第6図　6・7号墓遺物平面・垂直分布図

一面に同一高で集中する傾向が見られる。この骨のほとんどはイヌであった。骨鏃と石鏃は墳墓西壁上部に集中して出土した。壺形土器は足下に見られた。西壁出土の小型の壺形土器（第５図）は、別の墳墓の土器であり西側に別の墳墓が存在するものと考えられる。垂直分布を観察すると２つの分布ラインが見られる。１つは底面に見られる人骨の分布を示しているが、もう１つは獣骨・石鏃・骨鏃・土器を示しており、人骨の分布ラインより10～20㎝高位に見られる。

遺　物　壺形土器が１個体と石器、骨角器、鉄製品、動物遺体などが出土している（第７～９図）。

小　括　６号人骨同様、保存状態がよくほぼ全身の骨格が残されていたが、土圧で骨の大半が潰されていた。遺物の分布状況から判断して埋葬時に共に埋めたものと、ある程度埋土してから埋めた（置いた？）ものとがあるようである。第一次・二次で調査した３号墓の下層に構築されていたことを考えると、藤本編年ｅ群土器より古い時期の墳墓であることは間違いない。また、第二次調査で確認した５号墓と層位面での比較を行なうと、藤本編年ｄ群と同時期あるいは古い時期の墳墓であることは間違いない。



第７図　７号墓出土土器

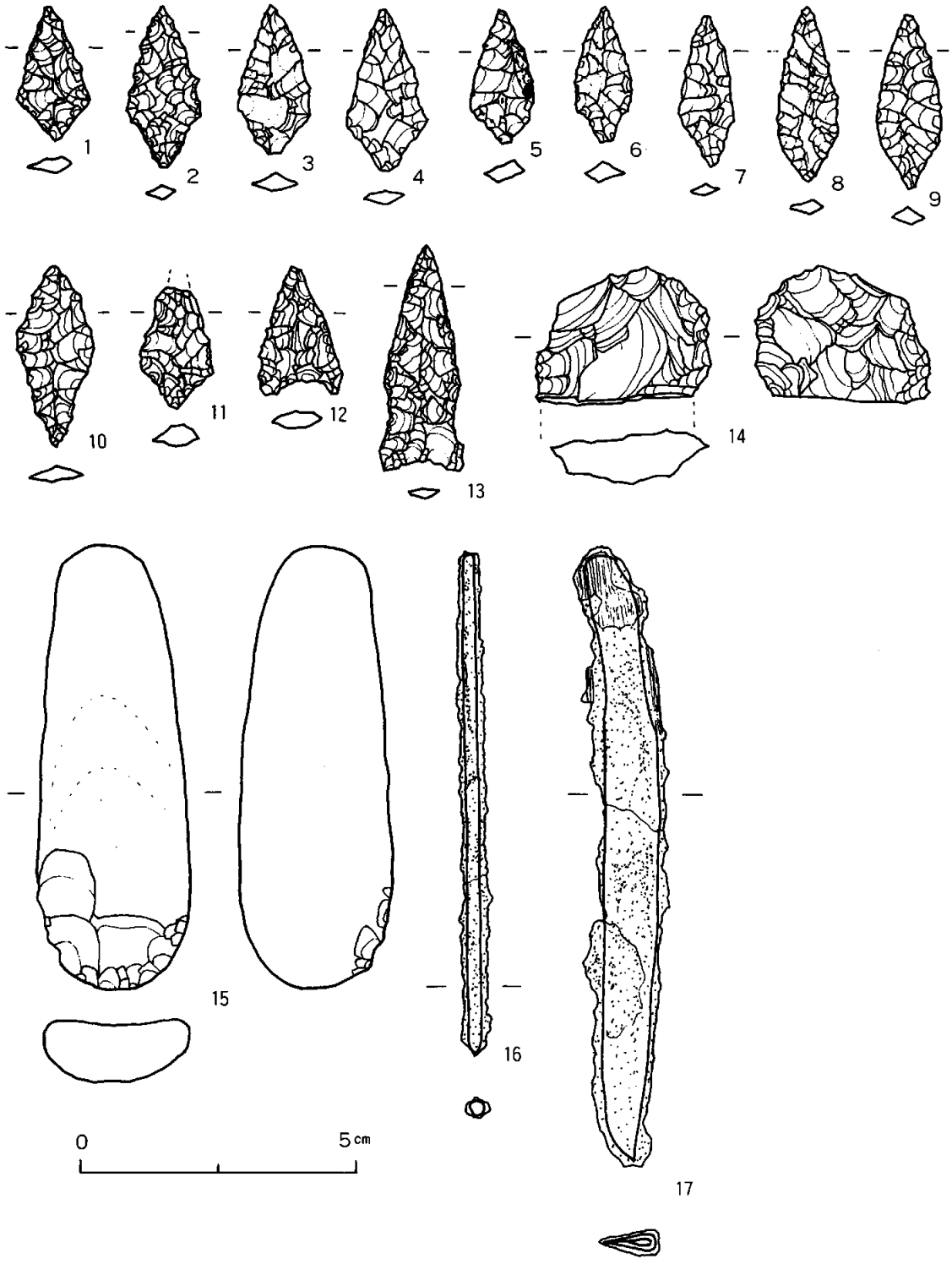
４．遺　物

１）土器（第７図）

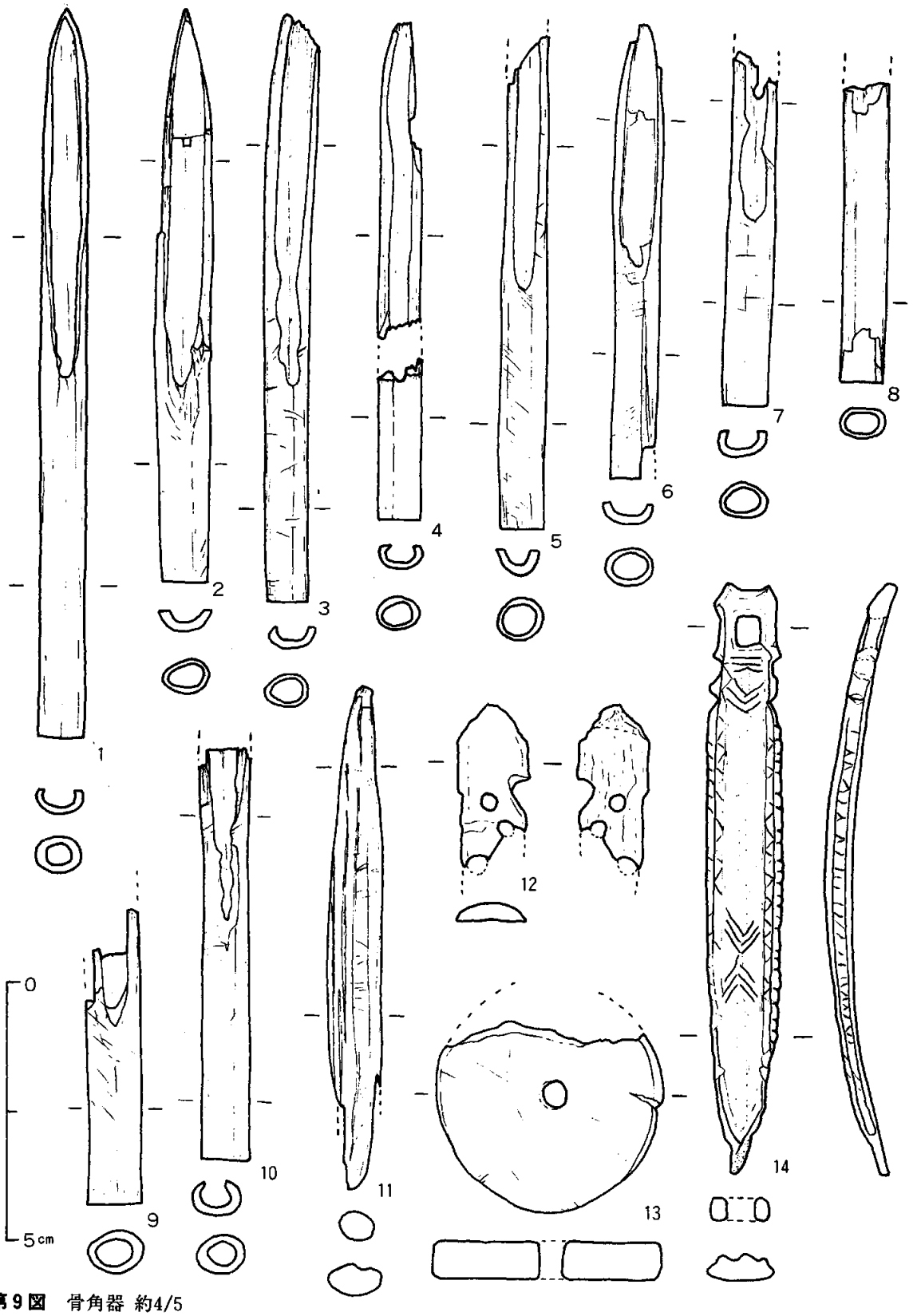
壺形土器（第７図）　口唇部断面形－やや丸い、口縁部に折り返しによる肥厚帯を有す。頸部－緩やかな曲線を描く。胴部との境界に繋ぎによる段差が観察できる。胴部－やや肩がはる。底部－平底。文様構成－口縁部と頸部との境界の肥厚帯に短い刻文、胴部の肩の部分に波形の紐状貼付文２列横走させる。計測値(㎝)－口径17、胴部張り最大幅－22、底部径－10、器高－30。断面厚(㎜)－肥厚帯11、頸～胴部－6、底部－10。焼成－やや良い、胎土－砂粒、小レキ含む。色調－全体的に赤褐色で、部分的に黒褐色や暗褐色の部分も観察できる。炭化物の付着は認められない。口唇部の短い刻文から考えると藤本編年のｃ群と思われるが、胴部の波形貼付文を考えた場合ｄ群とも思われる。

２）石器（第８図１～15）　石器は石鏃12点、銛先鏃２点、スクレイパー１点、さじ状石器１点の計16点が出土した。これらのうち石鏃１点は80年度の発掘排土、その他は全て７号墓から出土した。黒曜石製が４点・チャート製２点、材質不明６点である。銛先鏃は黒曜石製でそのうち１点は先端がかなり長いタイプであり、基部の両縁がくびれている（第８図13)。もう１点は、第８図12に示したもので石鏃の可能性もあるが、一応銛先石鏃とした。スクレイパーとしたものは、黒曜石製で作り方が粗い。ナイフかもしれないが、スクレイパーの可能性が高いと判断した。おそらく基部破片であろう。さじ状石器としたものは、第８図15に示したもので、自然石の先端を少し打ち欠いている。他端も少し摩耗している。機能が明らかではないのでさじ状石器とした。石鏃と銛先鏃は、骨角製の銛先と共に副葬されていたと思われる。なお、石鏃に矢柄が伴っていたかどうかは不明である。

３）骨角器（第９図１～14）　骨角器は銛先１点、骨鏃17点、中柄１点、髪飾り１点、有孔円盤（クックルケシ）１点の計21点出土した。それらは全て７号墓より出土した。銛先は鹿角？製で先端に銛先鏃を装着するためのソケットを持つが、器体は片側だけで、もう一方は鏃が全面露出しているタイプである。中柄受けはオープンソケットで器体中央に１孔とおそらくもう２孔が設けられ



第8図　石器・鉄器 約4/5



第9図　骨角器 約4/5

ていたようである。形態は少し奇異な点があるが、オホーツク文化の後半に道東部で見られるタイプの銛先であろう。骨鏃は全て鳥骨製で、アホウドリの尺骨を利用している。これらの骨鏃は完存品は２点しか図示できなかったが、発掘時点では全て完存品であり、保存状態が悪いので取り上げ時に破損したものである。そのうちの１点は内面全体に赤色物が塗られていた。このタイプの骨鏃はオホーツク文化および北方諸民族に特有のものであり、北海道在来の縄文文化や続縄文文化には見られないものである。これらの骨鏃のうち、No24～34までの10本は束になって、７号人骨墓壙内に伴っていた。また、石鏃も９個伴っており、骨鏃と石鏃がそれぞれ矢柄がついたまま副葬されていた可能性がある。中柄と思われる陸獣骨製の資料も出土した。刺突具の可能性もある。髪飾りは一端に四角い孔を開け、他端をとがらせたものである。クジラまたはアシカ類の肋骨を利用している。長さ11cmあまり、中央部幅は約1.5cmで側縁に刻みがあり器体は反っている。内側は研磨されているいるだけでその他の装飾的な加工はほとんど無い。外側（図の正面）はよく研磨され、海獣骨の内側の海綿体は残っていない。外側の中央部は少し盛り上がっており稜をなす。側縁近くには短い線刻が見られる。上部の孔の下と器体の中程より少し下にもまとまった線刻が見られる。この線刻はこの道具の所有者の印（アイヌのチロシ）かもしれないが、それよりも装飾的効果の為につけられたのではなかろうか。そして彩色を施したり、飾り布がつけられていたかもしれない。なお、この道具の機能については「髪飾り」以外の可能性もあるが、形態と装飾から見て髪飾りと推定した。いずれにせよ、オホーツク文化の骨角器の中でこのような形態で、また線刻を施された「髪飾り」のような例はこれまでに知られていない。

有孔円盤は鹿角の角座部分を輪切りにして研磨し、中央に孔を開けたものである。このタイプの資料は、後のアイヌ文化に見られる金属製の有孔円盤につながるものである。

４）鉄器（第８図16・17）　鉄製品として刀子と針？の２点が出土した。刀子は７号墓の墓壙上部の骨鏃などとともに出土した。刃部は約11cmで柄の部分は約３cm残っていた。柄はおそらく木製と思われる。針？としたものは、７号人骨の直上の墓壙覆土から出土したものである。現代のものの混入の可能性が考えられるが、ここでは一応７号墓に伴う副葬品としておきたい。針かどうかの判断もＸ線写真を検討した上で、別の機会に改めて報告したい。

５）動物遺体　７号人骨墓壙内および、その周辺から少量ではあるが動物の骨が出土した。

まず、魚類ではツノザメ類、ネズミザメ、主不明サメ１種、ニシン？、ホッケ？、フグ類が見られた。最も多く出土したのはネズミザメで、椎骨１点と歯14点が出土した。歯のうち基部が残っていたものは１点で、その他は歯冠部分のみであった。基部が残っていたものには孔が無かったことから、その他の歯にも基部に孔が開けられていなかった可能性が強い。しかし、同一種の歯がまとまって出土していることから、歯の加工の有無にかかわらずおそらく覆葬品の一部にサメの歯が装飾として用いられていたのであろう。ツノザメ類は椎骨１点認められただけである。ニシン？としたものはニシンまたはイワシ類と思われる椎骨で２点採集されている。おそらくニシンであろう。種不明サメ類としたものは、ネズミザメ以外の中型のサメである。ホッケ？は歯骨の破片でありアイナメの可能性もあるので？を付した。フグ類は上顎骨、歯骨など３点見られた。小型と中型の大きさの個体であり、種は不明である。

鳥類ではウ類とウミガラス類が見られた。ウ類は大腿骨が１点だけである。ウミガラス類は小型のウミガラス類であり、ウミスズメ類とすべきかもしれない。

哺乳類ではエゾヒグマ、イヌ、クジラ類、アシカ類、エゾヤチネズミ、エゾアカネズミ？、ドブネズミが見られた。ヒグマは下顎第一後臼歯が１点出土しただけである。オホーツク文化人にとってヒグマは神聖な動物であり「クマ送り」を行なっている。この遺跡で「クマ送り」に伴う頭蓋骨が安置されていたならば、この歯以外の歯や頭蓋骨が伴っていたはずである。その場合、下顎歯１点のみではなくもっと別の歯も出土したはずである。ところがこの歯のみが出土し、しかも保存状態が非常に良いことから他の歯が全て消失したとは考えられない。そうであるとするとこの歯が１点のみ意図的に墓壙内に入れられたことになる。イヌは頭蓋骨や椎骨は全く無い。尺骨と橈骨、ま

た踵骨・中足骨・指の骨がまとまって出土した例があり、また、基節骨や中節骨など指の骨が多い。これらは全て同一個体の可能性もある。この遺跡に埋葬されたとは思われない。このイヌの骨は、なんらかの意図で副葬されたり、この墓域内に置かれたと推測される。アシカ類の椎骨、エゾシカの骨片（陸獣骨片としたもの）なども見られた。なお、ネズミ類については自然に生息しているものの混入であろう。ネズミ類以外のものもなんらかの混入の可能性があるが、この洞窟内になぜこれらの動物骨が伴うかが問題である。現在のところ、覆葬品の一部、または埋葬後に供えられた可能性が強いのではなかろうかと考えている。

5．まとめ

ウトロ遺跡神社山地点では、1m×3mの狭い範囲にいくつかの墓壙が重複して設けられている。現時点での調査結果ではあるが、墓に埋葬されていたのは全て成人であった。

オホーツク文化の遺跡では、海岸部の家の側に幼児から子供の墓が設けられていることが知られており、成人の墓は洞窟や岩陰など極限られた場所でしか見つかっていない。もちろん、網走のモヨロ貝塚や最近発掘された北見枝幸の目梨泊遺跡などでは住居の側に成人骨が埋められていた例もある。その点ではこの遺跡はオホーツク文化の墓の立地として典型的なものということができる。

表－1　ウトロ遺跡神社山地点出土石器・骨角器・鉄器

出土物	品種	No	保存状態	現存長(mm)	材質	図	出土場所	備考
石器	石鏃	18	完存	29.3	チャート	8-4	7号墓	
		25	〃	27.1	不明	8-7	〃	
		35	〃	23.7	黒曜石	8-1	〃	
		36	〃	28.7	〃	8-2	〃	
		37	〃	31.1	不明	8-9	〃	黒色物付着
		38	〃	26.8	チャート	8-3	〃	
		44	〃	33.0	黒曜石	8-10	〃	
		45	〃	31.5	不明	8-8	〃	
		46	〃	24.5	不明	8-5	〃	黒色物付着
		47	〃	24.7	不明	8-6	〃	
			先端欠	21.5	黒曜石	8-11	〃	
			完存	29.8	不明	-	-	80年度掘残し　黒色物付着
	銛先鏃	81	〃	40.7	黒曜石	8-13	7号墓	
		82	〃	23.2	〃	8-12	〃	
	スクレイパー	89	破片	32.0	〃	8-14	〃	
	さじ状石器		完存	80.5	不明	8-15	〃	
骨角器	銛先	75	破片	30.0	鹿角	9-12	7号墓	
	骨鏃	1	完存	139.6	鳥骨	9-1	〃	中間幅：8.1
		12	破損	53.4+α	〃	-	〃	基部幅：7.7
		13	〃	35.8	〃	-	〃	
		24	破片	46.9	〃	-	〃	中に赤色物付き
		26	〃	60.1+α	〃	-	〃	
		27	〃	52.7+α	〃	-	〃	
		28	先端破損	57.2+α	〃	9-8	〃	
		29	先端欠	94.7	〃	9-5	〃	
		30	完存	110.8	〃	9-2	〃	
		31	先端欠	79.8	〃	9-10	〃	
		32	破損	68.0+α	〃	9-7	〃	
		33	〃	67.2+α	〃	-	〃	
		34	〃	49.8+α	〃	9-9	〃	
		42	先端欠	86.9	〃	9-6	〃	
		49	破損	-	〃	9-4	〃	
		50	先端破損	112.0+α	〃	9-3	〃	
		62	破片	42.0+α	〃	-	〃	
	中柄？	43	一部欠損	96.0	陸獣骨	9-11	〃	
	髪飾り	91	完存	113.6	海獣骨	9-14	〃	線刻有。中央部幅：15mm
	円盤	92	一部破損	43.8	鹿角	9-13	〃	
鉄器	刀子	2	刀身のみ完存	110.5	鉄	8-17	7号墓直上	
	針	7	頭部破損	91.6	〃	8-16	7号墓	

表－2　ウトロ遺跡神社山地点出土動物遺体

類別	種別	出土場所	部位	点数	備考
サカナ	ツノザメ	7号墓直上	椎骨片	1	
	ネズミザメ	7号墓	歯	1	
		〃 No9	〃	1	墓部あり
		〃 10	〃	2	
		〃 14	〃	1	
		〃 15	〃	1	
		〃 16	〃	1	
		〃 17	〃	1	
		〃 19	〃	1	
		〃 23	〃	1	
		〃 63	椎骨		
			歯	3	80年度掘残
	サメ類	7号墓 No7	椎骨	1	ネズミザメではない
	ホッケ?	〃 直上	歯骨L	1	
	フグ	〃 〃	歯板(上下不明)	1	小型
		〃 No11	歯骨R		
		〃 67	上顎骨L		中型
	ニシン?	〃 直上	椎骨片	1	
	ニシン		椎骨	1	80年度掘し
	種不明	7号墓直上	椎骨	1	
		7号墓	椎骨	1	
		〃	骨片	1	
鳥類	ウミガラス類	表採	尺骨L		小型
		7号墓直上	頭蓋骨片L		
		〃	腕骨L		
		〃	烏口骨L・R		
		〃	橈骨L		
		〃	中手骨	1	
		〃	下顎(くちばし)骨片L		
		〃 No64	尺骨L		小型
			中手骨L		〃
	ウミウ?	7号墓 No58	大腿骨R		
	ウ類	表採	大腿骨L(中間部)		
	種不明	7号墓直上	骨片		
		〃 覆土	腰骨L		小型
		〃 〃	上腕骨(中間)		
		7号墓	骨片	1	
		〃 No69	骨片	1	
			椎骨	1	80年度掘残し
			指	1	

類別	種別	出土場所	部位	点数	備考
哺乳類(陸獣)	イヌ	7号墓直上	基節骨	1	
		〃	末節骨	1	
		〃	中手足骨	1	
		〃	中節骨	1	
		〃 No5	基節骨	1	
		〃 8	〃	1	
		〃 52	中節骨	1	
		〃 53	基節骨	1	
		〃 54	〃	1	
		〃 55	〃	1	
		〃 56	〃	1	
		〃 57	中節骨	1	
		〃 63	踵骨R		
		〃	中手足骨	4	
		〃	指基節骨	1	
		〃	指末節骨	1	
		〃	足根	1	
		〃 No66	末節骨	1	
		〃 No68	尺骨R		同一個体
		〃	橈骨R		長さ：134.1 上幅：16.7 下幅：20.7
		〃 No73	上腕骨R(中～下)		
		〃	中節骨		80年度掘残し
	ヒグマ	7号墓	右下顎骨第1後臼歯		
	エゾヤチネズミ	〃 直上	下顎骨R		
	ドブネズミ	〃	大腿骨R		
	エゾアカネズミ		下顎骨R		80年度掘残し
	種不明(陸獣骨)	表採	骨片	2	
哺乳類(海獣)	クジラ	7号墓直上	骨片	1	
		〃 No39	骨片	1	
	アシカ類	〃 No41	椎骨	1	若獣
	種不明(海獣骨)	表採	骨片	1	
		7号墓覆土	骨片	10	
		〃 No59	骨片	1	
	種不明	7号墓 No6	骨片	1	
		表採	焼骨片	1	
			〃	10	80年度掘残し

そして今回、知床半島のオホーツク文化の中心をなすウトロ地域で覆葬品として鳥骨製の鏃を用いているという性格が明らかとなったことは注目すべきことである。最近、オホーツク文化の副葬品も時期と地域によってかなり異なっていることが明らかになりつつあり、この遺跡もその点で地域性を示している良好な例といえる。

謝　辞

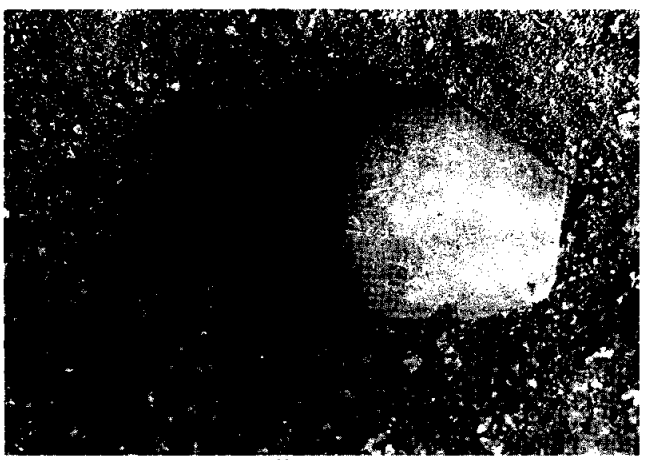
調査にあたり、斜里町教育委員会前教育長の田中輝之氏をはじめ、知床博物館館長の金盛典夫氏、知床博物館の諸氏には格別のご支援を賜わった。ここに深謝の意を表したい。

なお、本研究の一部は平成2年度、知床博物館ウトロ遺跡神社山地点発掘調査委託として行われたものである。

写真1

1．6号人骨出土状況

2．7号墓副葬骨鏃及び石鏃出土状況

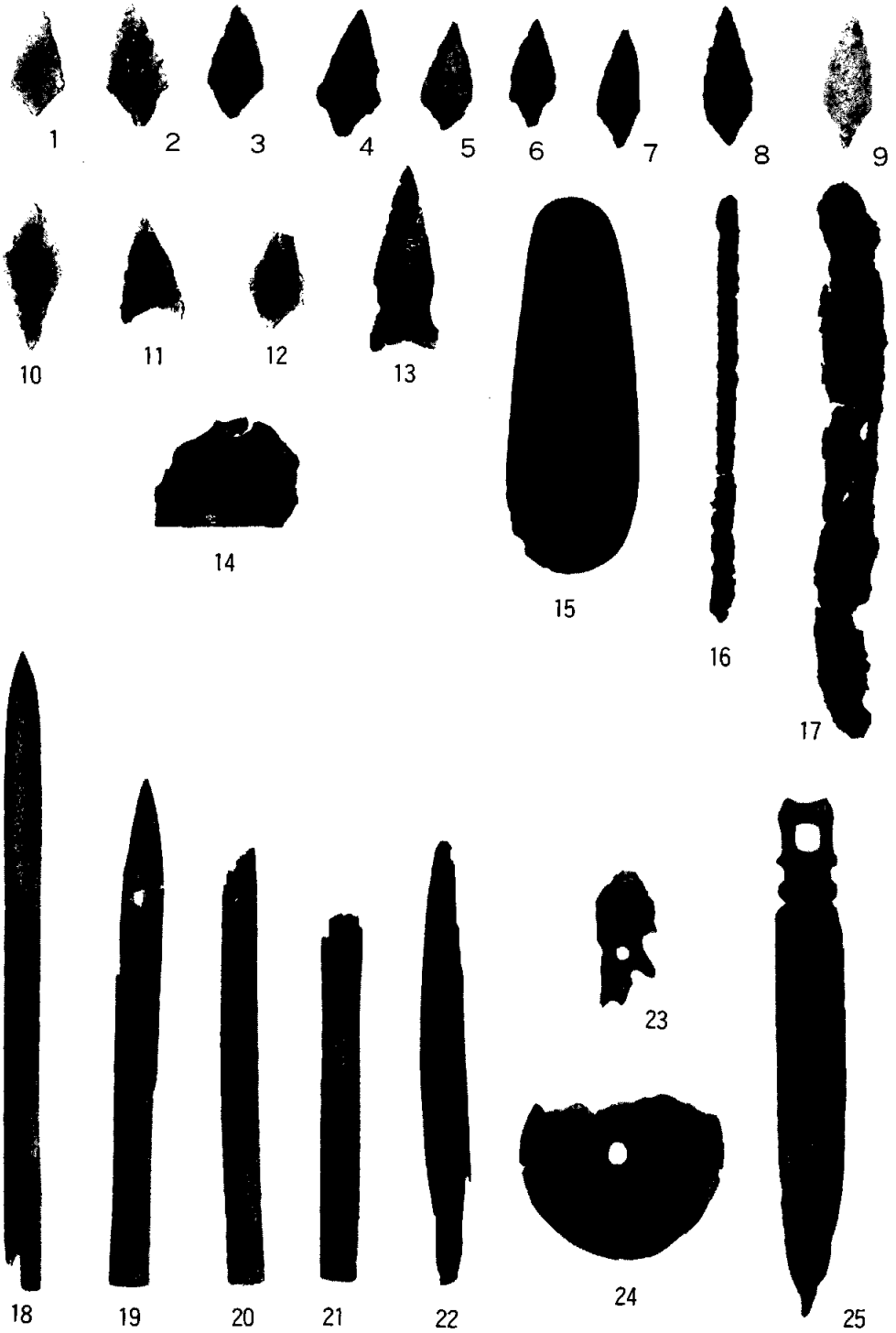


3．7号墓副葬土器出土状況

4．7号人骨出土状況

5．6号墓・7号墓完掘状況

写真 2　石器・骨角器 約2/3



1～10・12，石鏃　11・13，銛先鏃　14，スクレーパー　15，さじ状石器　16，鉄針　17，ナイフ
18～21，鳥骨製の鏃　22，中柄　23，銛先　24，有孔円盤　25，髪飾り